

第2代会長挨拶（丸川知雄）

2016年11月7日に慶應義塾大学で開催された全国大会の際に開かれた理事会にて本学会の2代目の会長に就任いたしました。本学会はこれまで厳善平初代会長のもとですばらしいスタートを切りました。2015年9月には復旦大学でTransition and Economic Development (TED)の研究集会を共催し、数多くの会員が発表したことは記憶に新しいところです。これからも国内の大会や研究集会および学会誌で会員どうし切磋琢磨するとともに、本学会として海外での研究会合の共同開催にも力を入れ、会員の積極的な参加を奨励していききたいと思います。

本学会にとって誠に残念なことは、私とともに昨年まで本学会の副会長を担われた加藤弘之先生（前神戸大学教授）が昨年8月に病のため亡くなられたことです。もしお元気であればこの挨拶はきっと加藤先生が書いていたことでしょう。

加藤先生は中国経済経営研究の立ち位置ということをもっと突き詰めて考えておられた方だと思います。つまり、経済学や経営学というディシプリンに対して、中国の研究はどういう関係に立つのかという問題です。片方には、自分の本拠は経済学や経営学というディシプリンであり、中国は理論を検証したり発展させるフィールドの一つだ、という立場があるでしょう。加藤先生もかつては中国研究を通じて経済学の理論を前進させるのだ、ということを書いておられたと記憶しております。しかし、それを実践しようとする中国というケースはどうにも収まりがよくありません。経済体制が一般の資本主義とは異なるため、中国の事例は特殊だとみなされがちで、理論を検証するケースとして有効だとなかなか認めてもらえないのです。

加藤先生の最後の著作となった『中国経済学入門』（名古屋大学出版会、2016年）ではこれとは真逆の立場が表明されています。すなわち、中国の独自性にこだわり、中国のことを説明できる理論を中国のなかから取り出すのだと宣言しています。もし中国研究者が20年前にこのような主張をしていたとしたらかなり独りよがりにも聞こえたでしょう。しかし、中国経済の成功が明らかになった今日、こういう立場をとることも可能になったのだと思います。私自身は、自分の本拠は中国研究だと思っており、中国のことを理解するのに経済学や経営学のディシプリンを援用することは有用だし、自分もなるべくそうしたいと思いますが、自分の研究が理論を前進させるのに貢献できるかと問われれば、まあ運がよければそういうこともあるかなぐらいに思っています。

さて、本学会の立ち位置はというと、上記のいずれの立場の人も歓迎されるのが中国経済経営学会だ、と言えます。私のように、だいたいいつもなにがしか中国に関わることを研究している人間は本学会の常連となる傾向がありますが、そういった土着民ばかりでは本学会の活力も下がっていくと思います。自分の本拠はディシプリンだと言う人も、中国を研究対象としている間は本学会に来て、ぜひ中国研究の人たちと対話し、切磋琢磨してほしいです。本学会を、中国の経済や経営の研究に短期滞在する人も長期滞在する人も気持ちよく楽しく議論できる場にしたいですし、もし学会の会員制度にそうした意図と合わないところがありましたら改善していききたいと思います。

(2017年4月記)